

2012. 04. 28(土) 女川町総合運動公園仮設住宅にて行われた

「炊き出し&なんでも相談会」(主催: 宮城災対連・東日本大震災共同支援センター)
への参加レポート

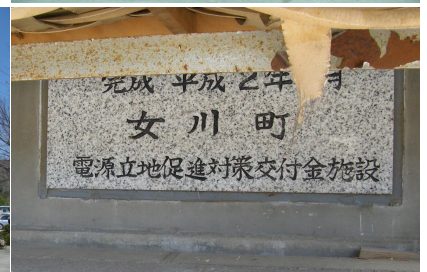
小野 誠一

前夜東京駅を深夜バス(東京支部・松木さんと田村さんと乗合わせ)で出発し、翌早朝仙台駅に着きました。私にとっては昨年5月末以来の約1年ぶりの被災地訪問になります。行きのバスの中で、松木さんから女川町の関係資料などを読ませていただきながら、相談会といっても、私などに果たしてその役が果たせるのか心配な心持でした。仙台駅で宮城支部・佐々木さんと待ち合わせをし、女川町を目指しました。

道々に見える光景は、改修が施されている家屋等も見られる中、解体整理されて更地のままとなっているところ、未だ放置状態のままのところなども多く、「誰もが」の自立再建の難しさを感じつつ、施策スピードもまた求められているように感じました。女川町の港周辺も、転倒した鉄骨造やRC造の建物がまだ残されていましたが、それ以外の多くの建造物は撤去されていました。仮設住宅のある総合運動場は高台にあり、その道の両側は瓦礫が山のように積み、作業車が土ぼこりの中行き来していました。その中に被災された原子力関係施設が手がつけられず残っていました。

女川町総合運動場には、2種類の仮設住宅エリアがあります。一つは、プレファブメーカーによる平屋建て124戸。少し離れたもう一つは野球場内に建てたコンテナ積上げ型の2階建て、3階建てからなる189戸、このエリアでは集会場や子ども図書館などが設えてあり、隣接する仮設住宅間において施設整備の差が生じていることが住民間の感情的な問題を発生させているといった事や、そもそも抽選入居だったためコミュニティの問題もあるといったお話を伺いました。

大きな体育館のホールでは子どもたちの遊んでいる姿が見られ、陸上競技場内では、ゲートボールをする方々の姿が見られました。その陸上競技場内にはJRバスの定期便が行き来し、住民の足となっているようでした。なお当初人口約1万人弱という規模の町の施設としては、大変充実した施設と感じましたが、いわゆる原発マネーがこうした公共施設整備を充実させていたように感じました。ここで、群馬支部の新井さんと娘さんも合流し、宮城災対連の方々と合流して、相談会の準備をお手伝いしました。炊き出し部隊の方が交通事故のもらい事故に遭われたとの事情で、この日は炊き出しは中止となりました。それでも11時から13時までの予定でしたが、



開始前から行列ができ、用意していた支援物資も 12 時くらいにははけてしまい、少し早めに閉会しました。支援物資は、洗剤、湿気とり、ラップ、かつを節、即席めんといった生活必需品や農民連からのお米、野菜、それから、葛飾区上平井中学生徒会からの文房具、青年海外協力隊の方は衣類や靴などを用意されていました。

多くの荷物を持ち帰るために荷物を持ってご自宅まで一緒に運んだりといったサポートも行っていました。

原発の廃止を求める署名なども仮設住宅を回りながらお願いしていました。女川町では、以前は原発署名は難しい面があったが、変化してきた様子との話が聞かれました。

相談のブースでは、民医連の医師や看護スタッフの方や、青葉の会という弁護士グループと、私たち新建という構成でした。建築関係の相談は、自らも被災し女川町仮設住宅に住まわれている町議・高野さんから、今後の対策についてなどの話をされ、佐々木さんを中心に対応しました。

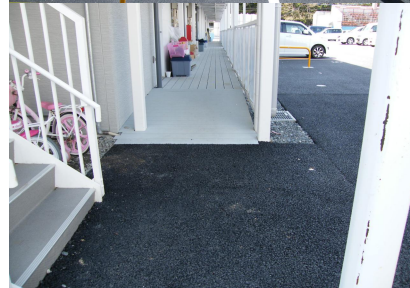
危険区域の方は高台移転かかさ上げかの選択となっているが、かさ上げは時間がかかることが予測され先が見えないと感じている。高台移転も世帯 100 坪となっているが、民宿などの商売をしている方は 100 坪では成立しない…。

こうしたことに、例えば 2 世帯として 200 坪確保した中で工夫していけないか、従前コミュニティで利用していた商店などであれば、そのままのコミュニティで高台移転すればむしろ喜んで利用してくれるのではなど、コミュニティとの関係からの話をされていました。また、この運動場に UR が 200 戸の店舗を含んだ集合住宅の計画が進んでいる。災害公営住宅のあり方としてどうか、RC 造のビルになってしまうのどうかと心配…。

これについては、木造で長屋のようなつくりのケースのあるようだ。進んでいるとはいえ、要望をきちんと出すべき。とし、地域振興課の窓口等、佐々木さんの地域人脈を生かした関係者つながりのアドバイスなどをされました。

他に、自立再建の方が施策から漏れている問題についてや、建て替えに関する規制についてなどを話し合いました。(といっても私は後方からお聞きするだけでしたが。)

仮設住居へのヒヤリングなどは今回行われませんでした。また炊き出しが残念ながらできなかったこともあってか、支援物資を配ったらそのまま帰られてしまう感じで、状況についての聞き取り把握という視点としては弱かったように感じましたが、同時に、ヒヤリングなどを行っていくことはある程度定期的にはできるだけ顔の見える関係で行っていくことが、さまざまなグループが聞き取りをされていることなどを鑑みると望ましいように思いました。そう考えると一定組織的に対応しないと困難だとも思えますし、どういったスタンスで声を聞き、必要な支援につなげられるか、寄り添えるかは、日々議論していかななくてはいけないことなのだなと感じました。



この後、町議・高野さんのご好意で、住まわれている野球場内のコンテナ3階仮設住宅を案内していただきました。

このコンテナ積み仮設住宅は、坂茂建築設計+ボランタリー・アーキテツク・ネットワーク（VAN）が町からの委託で造られたもの。収納箱の製作等にボランティアを募って造られています。

断熱もなされており、実際のところ結露に悩まされることは無かったとのことでした。2階から上の住戸も掃き出しサッシが設けられ明るい室内で、収納箱も助かっているとの事でした。お風呂が狭いことや、給湯式湯沸かし器なものできれば追い炊き式が望まれる事などがあるものの、仮設で終わらせず、公営住宅化していくことでも十分ではないかといった声もあるとの事でした。隣接したプレファブ平屋仮設住宅は、県の事業として建設されたが、このコンテナエリアは、町の責任で行われた事業だそうです。3階建て共同住宅は、建築基準法上、耐火建築物としなくてはならないが、このコンテナ積み上げ型では耐火構造にはならないため、県は関与を避け、町の責任で進めたという経過があったようです。したがって、今後このコンテナの活用や扱いについては、課題があるようでした。

こちらのエリアには、付帯施設として、コンテナを基礎・主要構造としたマーケットと呼ばれる膜構造屋根の建築と集会場、そして坂茂氏の紙ボイド管を構造材に使った図書アトリエなどが、仮設住宅群の中心に配置され、コミュニティの核として位置づけられ活用されています。ミュージシャン・坂本龍一氏らによる寄贈という形で建設されたとの事でした。

子どもたちの遊ぶ姿もこのエリアで多くみられました。外部がすべてアスファルトで舗装されているのが、夏場の照り返しがどうかと少々心配な感じがしました。

運動公園内に、「写真展示場はこちら」という看板が出ていたので何の写真かなと行ってみると、この日はお休みでしたが、「思い出検索所」ということで、ボランティアが被災地に残された写真を水洗いしてデータ化してあるそうで、それらをパソコンで探し出して、ほしい写真があれば原本を受け取ることができるというシステムとなっているようでした。

女川町を離れ、ここからは佐々木さんの案内で、いろいろと見てまわることになりました。ひとまず雄勝町を経由し十三浜を目指します。途中遅い昼食をとろうということでしたが、さすがにお店はなかなかありません。たまに、瓦礫処理作業員の方を目当てにした移動弁当屋さんがあるのを見かけました。しばらくいくと、津波被災した雄勝町役場の前が、プレファブの仮設商店街となっており、ここで、昼食をとりました。お寿司やさんをされていたようですがメニューは、決して豊富とはいいい難かったのですが、やはりここは海のものでしょうということで、みんなで海鮮丼をいただきました。ニュース23の膳場さんのサインなど、サイン色紙がいっぱい飾ってありました。



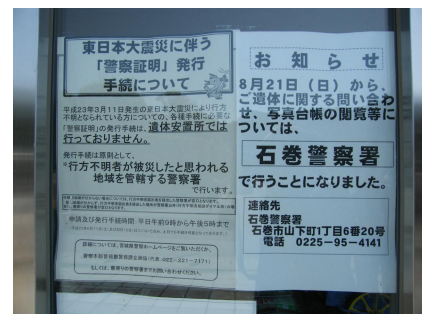
途中、大川小学校に立ち寄りました。献花台に手を合わせる方々が絶え間なく訪れているようでした。校舎建築はデザインが凝ったつくりになっています。後で調べたら、レーモンド事務所出身の建築家の設計のようです。海川・道路に背を向けた校舎配置や屋上に出られない造り等、地域事情の詳しい設計者でなかったことなど、設計に問題があったとされる記事も目にしました。身につまされる思いがしました。さまざまなことを想定し、立地も含めて、考えをきちんと持って仕事にのぞまなくてはならない責任の重大さを再認識させられました。

その後、北上町白浜復興住宅に寄りました。マスコミ等に紹介されることも多く、見学に訪れる方が多いことから、住民は少々ナーバスになっているとの事より、外からさらっと歩きました。外壁杉材の美しさや屋根の雄勝スレートなど、シンプルで質の良さが伝わる住宅群でした。なんといってもそのロケーションが良いです。当初予定していた立地（昨年案内していただいた）の隣接地での実現となったようでした。

そして、相川運動公園仮設住宅に寄って、東海大学・杉本教授のチャレンジセンターチームが中心となって建てた国産間伐資材によるどんぐりはうす集会所を見ました。昨年訪れた時は、たまたまその立地場所の打ち合わせをしに同行したのですが、そのときのイメージでは、仮設住宅エリア内にとの事だったような気がしましたが、公園外の管理棟の横に位置されていました。コミュニティ拠点としての配置を考えるとちょっと残念な気がしました。階段でのアプローチも高齢者には少々大変かなと感じました。それでも子どもたちの遊んでいる姿が見られてよかったです。技術面でいうと防水対策がどうかとちょっと思いました。ウッドブロックの継目部分はコーキングに頼っているようでしたので、仮設からさらに恒久的利用を考えると、さらなる工夫が必要そうな気がしました。

そして、十三浜の佐々木さんの住宅・事務所があった場所に到着。地域ボランティアの拠点として利用されていることもあり、暖炉がついたり、大きなテーブル椅子、書棚等整備されていました。事務所内も少しずつ再生されていました。今後は上屋の再建を目指して、構造的な課題の整理を含め設計中だそうです。また、この地区の方々の集団高台移転先の候補地提案図を作成して協議を進めていたり地域再生に向けて精力的に活動をされています。

他にも、地域型住宅ブランド事業の宮城県版といったような「地域型復興住宅の地域住宅生産者グループ登録」という公募に2つの母体（「つぐっぺおらほの復興家づくりの会」「杜の家づくりネットワーク」というグループで）でエントリーしているとの事でした。長期優良住宅を進める動きとの関係もあり、地域住宅としてそれ以外の道（伝統的なすまいづくりなど）も大切にしていかななくてはという思いも話されていました。





その後佐々木さんのご都合もおありだという中、2箇所立ち寄ってくださいました。

1つは、登米市津山町にある気仙大工の名工・花輪喜久蔵の作といわれる「横山不動尊」。垂木が扇状に配されているのが特徴との事。



本堂の屋根の形状も宝形屋根の上に小さな宝塔が乗っているちょっと繊細な佇まいで、彫り物など見ごたえのあるものでした。

そして最後に、同じく津山町にある道の駅「もくもくはうす」。津山町は、杉材の産地として流通に力を入れているようです。地場の杉材を活用した木工加工品の販売や木工教室などさまざまな企画を通して津山杉をアピールする拠点としての役割があるようでした。

その道の駅の建築群もなかなかの現代木造建築です。円形の塔に柔らかな屋根が架かったものが高さにも変化をつけていくつも建っていて、独特の楽しい施設となっています。しかし、この建物群は震災後は使われていないようです。



これらと隣接して建つバナナ状の平面形状の片流れ屋根の大空間がメイン施設となっており、楽しい木工小物などがたくさん売られていました。

戦後の植林事業で育った杉材が全国規模で活用されることを待望されていることを実感しました。



群馬支部の新井さんたちとはここでお別れし、私たちはこの後、河北ICまで送っていただき、そこからバスで仙台へ戻り、夕食を食べて、新幹線で帰路に着きました。

(連日の深夜バスは体力的にきついと判断しました。)

佐々木さんには、お忙しい中、いろいろとご案内いただき本当に感謝いたします。ありがとうございました。天候もよく、予期していませんでしたが、行く先々桜が満開ということで、なんだか半分観光気分のような感じでもありました。

今回見たルートも約1年前とほぼ同じルートでしたが、少しずつではありますが変化を遂げている街の姿と、仮設住宅の暮らしかから次の展望へと試行錯誤し努力されている住民の姿を感じることができました。それぞれの暮らしの事情に合った最良の選択ができるような施策に期待したいと思います。